

1 単元 わたしの がっこう どんな ところ

2 教科の目標

学校の施設に関心をもち、探検を繰り返し、施設の特徴やそこに従事する人に気付くとともに、自分の大好きな場所や人ができ、学校に対する愛着をもつことができる。

3 活用したICT

デジタルカメラ 教材提示装置

4 活用したICTの工夫

言葉では伝えられない内容を視覚的に補う。(教材提示装置)

5 実践の様子

① インタビューの相手決め

はじめに、一人ずつインタビューする相手を決めることにした。子どもたちは、1年生の担任と一部の教職員の顔と名前しか分からなかった。そこで、教職員の顔と名前を一致させるため、拡大印刷した職員写真に、知っている職員の名前を記入させた。インタビュー活動への抵抗感を減らして期待感をもたせるため、名前が分からなかった教職員については、休み時間に名前を聞いてくるようにして、教職員と簡単な言葉を交わすことを経験させるようにした。

② インタビューの内容決め

初めてのインタビュー活動であり、質問を考えられない子どものために、「どんな仕事をしているか。」という質問は必ず聞くようにした。学級で話し合い、「1年生が帰った後は何をしているか。」や「得意なことは何か。」などの中から、聞きたいことを選ばせるようにした。



資料1 インタビューしている様子

③ インタビュー活動

インタビュアー、カメラマン、メモの補助の3人のグループでインタビュー活動に取り組んだ。すべての役割を経験することができるように、役割を交代しながらインタビュー活動を行い、グループごとに3人の教職員にインタビューを行うようにした。(資料1)

④ インタビュー内容の発表

教職員の顔と名前を覚えていない子どもにも伝わるように、デジタルカメラで撮影してきた顔写真を教材提示装置を使って提示させた。さらに、調べてきたことを分かりやすく発表することができるように、インタビューカード(資料2)を見ながら発表してもよいことを伝えた。



資料2インタビューカード

6 成果と課題

- 教職員の写真を教材提示装置で提示して視覚的に補うことで、インタビューして分かった内容を伝えやすくし、施設に従事する人に気付き、学校に対する愛着をもつことができた。
- 担任以外の教職員という、子どもの興味に沿った題材を設定したことで、聞きたいという気持ちが高まり、自信をもって笑顔で発表することができた。
- 下を向いてしまい、聞こえる声で発表することができなかつた子どもがいた。「緊張して疲れた。」と発表に消極的な子どもも見られた。画像の提示の仕方を工夫して、聞き手の顔を見て、話すことができるように工夫する必要があった。